

日本語の引用

鎌田 修

【著】

ひ つ じ 書 房

日本語研究叢書



日本語の引用

鎌田 臧 修 草

【著】



ひつじ書房

日 本 語 研 究 叢 書

【第2期第2巻】 日 本 語 の 引 用

発行日	2000年1月31日初版1刷
定価	3200円＋税
著者	©鎌田 修
発行者	松本 功
装丁者	石原 亮
印刷所	株式会社 MAPS・株式会社 田中製本印刷
製本所	株式会社 田中製本印刷
発行所	有限会社 ひつじ書房

101-0064 東京都千代田区猿樂町 2-2-5 興新ビル 206
Tel.03-3296-0687 / Fax. 03-5281-0178
郵便振替 00120-8-142852

造本には充分注意しておりますが、落丁乱丁などがございましたら、小社宛お送り下さい。送料小社負担でお取り替えいたします。
ご意見、ご感想など、小社までお寄せ下されば幸いです。

info@hituzi.co.jp <http://www.hituzi.co.jp/>

本書を複製する場合、書面による許可のない場合は、不正なコピーとなります。不正なコピーは、販売することも、購入することも違法です。法律の問題だけでなく、学術・出版に対するきわめて重大な破壊行為です。組織的な不正コピーには、特にご注意ください。

ISBN4-89476-118-1 C3081
Printed in Japan

CONTENTS

目次

日本語の引用

序章 伝達のからくりと引用研究	1
1. 本書のねらい：伝達のからくり	1
2. 引用研究への取り組み：基本的な立場	6
2.1. 伝達の引用	6
2.2. 引用表現の捉え方	7
2.3. 分析の方法	8
3. 本書の仕組み	9
第1章 引用、話法、「と」及び引用動詞	13
はじめに	13
1. 引用と話法	14
2. 引用を導く助詞「と」について	21
2.1. 「と」の現れる言語環境の構造記述	23
2.2. 「と」の構文的扱い	29
2.2.1. 奥津（1974）などの立場	29
2.2.2. 柴谷（1978）の立場	31
2.2.3. 藤田（1986など）の立場	32
2.2.4. 藤田（1986など）の問題点	36
3. 引用動詞について	41

第2章 引用句創造説と直接引用 51

1. 引用句創造説 52
2. 直接引用句 63
 - 2.1 直接引用句の形態 64
 - 2.1.1 新たな「発話」を成立させるもの 64
 - 2.2 直接引用句の生成 68
 - 2.2.1 効果的な場作り：劇的効果をもたらす表現手法 69
 - 2.2.2 パターンを利用した引用句作り 74
 - 2.2.3 その他 78
3. まとめ 81

第3章 間接引用 85

1. 間接引用 87
 - 1.1 定義 87
 - 1.1.1 先行研究 87
 - 1.1.2 定義 92
 - 1.2 間接引用 97
 - 1.2.1 間接化がもっとも進んだ引用 97
 - 1.2.2 引用助詞「と」を伴わない引用句を持つ間接引用 98
 - 1.2.3 引用助詞「と」に導かれる引用句を伴う間接引用 105

第4章 準間接引用：引用とモダリティ 117

1. モダリティと主格選択：仁田の研究 119
 - 1.1 仁田（1985, 1989, 1991）のモダリティ分析 119
2. 引用句における主格の選択と準間接引用 122
 - 2.1 「表出のモダリティ：感情・知覚表現」と準間接引用 122
 - 2.1.1 独立文における表出のモダリティと主格選択 122

2.2 「感情・知覚表現と主格選択」の制約が緩む言語環境	124
2.3 感情・知覚表現の主格選択と引用	129
2.4 「述べ立て」のモダリティ：「現象描写文」と準間接引用	136
2.5 「働きかけ」のモダリティ：「命令」「誘いかけ」と準間接引用	140
2.6 その他のモダリティと準間接引用	145
2.6.1 様態の「～ようだ」「～そうだ」など	146
3. まとめ：「準間接引用」の位置づけ	149

第5章 準直接引用，直接引用(再考)と衣掛けのモダリティ 157

1. 準直接引用	157
----------------	-----

第6章 マクロ的分析とまとめ 引用句総観 165

1. 情報領域と引用	165
2. まとめ：引用句総観	172

参考文献	177
------------	-----

索引	185
----------	-----

あとがき	195
------------	-----



序 章

伝 達 の か ら く り と 引 用 研 究

1. 本書のねらい：伝達のからくり

我々の言語活動は伝達という行為を源に成り立っていると言っても言い過ぎではなかろう。ある話者が述べたことをそれを聞いた人が、それを自分なりに解釈し、それを誰かに伝えるという行為であるが、そのような活動を通して我々は日常の生活を成立させている。例えば、本書に絶大なる関心を抱いてくださった方がその読後感を誰かに伝えましょう。そして、それを聞いた別の方が実際に本書を読みたくなり、近くの書店に注文するとする（ぜひそうあってほしいのだが）。しかし、本書は専門書であり、一般の書店には置かれていないため、その書店と出版元のひつじ書房との間に何らかのやりとりが必要となってくる。最初に本書を読んだ方はその気持ちを何らかの方法で表現する。そして、それを聞いて実際に本書を手にしたくなった方は近くの書店に行き、友人に触発されて本書をすぐにでも読みたくなったというような説明を加えて注文するかもしれない。できるだけ早く本書を入荷させたい

その書店はひつじ書房に至急送ってほしいという催促状を出すかもしれない。このようなことはあまり現実的ではないにしても、我々の生活がこのような言語的やりとりで満たされているという事を疑うものはいないであろう。

しかし、このような伝達という行為がどのように言語化されるかということとはそれほどよく分かってはいない。伝達には元の発話を文字通り伝える方法と伝達の場合に合わせた方法、いわゆる、我々が中学、高校時代に学習した英語の直接話法と間接話法という区別に相当するものがあると言われる。しかし、前者の「文字通り伝える」直接話法という言語表現がいかに文字通り伝えられない、あるいは伝えないものであるのか、ということに我々は意外と気づいていない。実際、我々が日常おびただしい量で生産している伝達に関わる表現を注意深く観察すると、いわゆる直接話法という表現が元の発話を文字通りに伝達していない(あるいは伝達しない)だけでなく、また、元の発話に類似させることもなく、むしろ、新たな表現を伝達の場合にふさわしい形で創造する直接引用を行っていることが分かる。

次の例は、筆者が実際に経験した伝達行為であり、伝達表現がいかに元々の発話とはかけ離れた、むしろ、伝達の場合に暗に期待されている表現でなされるかを如実に物語る事例である。ちなみに、筆者は京都に居住し、ある日講演のため東京へ出かけ、その日のうちに帰宅することになっていた。

- (1) 筆者が東京の某書店において講演を行った後、その書店の事務員から受け取ったメモをそのまま転記

鎌田先生、奥様よりご伝言：

「ただいま大阪の梅田にいます。約束通りの場所で待っています」

とのことでした。

15:14 p.m. ○○受

しかし、筆者の妻がこのメモを書いた当書店の○○氏に告げたことは次のよ

うな発話であった。

- (2) 「今、大阪の梅田から電話をしています。予定していたところに行きます。だから、そのように伝えておいてください。」

(1)は〇〇氏から受け取ったメモをそのまま転記したもの。(2)は筆者が帰宅後、この件について妻に尋ね、彼女の記憶をたどってできるだけ忠実な表現に「再現」したものである。筆者は妻とは待ち合わせの約束は一切行っておらず、どうして(1)のような伝言を受けたのか不安になり、妻が見舞いのため訪ねていった大阪の某病院へ電話をしたところ、偶然その場に妻がいなかったため次のような伝言をお願いすることになった。

- (3) 筆者が妻の行き先である大阪の某病院の看護婦さんに述べた発話

「家内にまだしばらく東京の書店にいるので電話してほしいと伝えてください。」

しかし、この看護婦さんが妻に残した伝言のメモは次の通りである。

- (4) 筆者が伝言をお願いした看護婦さんが妻に残した伝言メモを転記

「主人^{さん}から tel あり、しばらく東京の本屋にまだ居ますので tel くださいとのこと」 (16:20)

どうしてこのようになるのであろうか。たしかに、我々の伝達行為には「聞き違い」というものはつきものである。また、それを楽しむ伝言ゲームという遊びが存在することも事実である。しかし、これらの事例を注意深く観察すると決して「聞き違い」では済まされない言語事実が潜んでいることに気づく。敢えていえば「聞き違い」を是認するとでもいうべき言語的コン

テキストが存在することに気づく。

まず(1)と(2)の違いであるが、妻の述べた「… 予定していたところへ行きます」を〇〇氏が「約束のところで待っています」とメモにした点は、このような状況においては誰しもそのように解釈し、また、そのように伝えてしまうという可能性を十分に含んでいるのである。そもそも妻のいた大阪から東京で講演を行っている筆者のところに電話があるということは、筆者と妻の間で交わされていた予めの情報を持たないで電話を突然受けた者なら、また、「大阪の梅田」という繁華街の名前が出れば、当然、誰しも「待ち合わせ」の伝言であると考え得るであろう。それが「スキーマ(schema)」というものである。したがって、〇〇氏はたまたまそのようなスキーマに従っただけだという推論は決して無理なものではない。つまり、(1)の発話に見られる直接話法表現は東京の某書店で筆者が講演を行っているとき、事情を知らない〇〇氏が電話を受けた、という言語コンテキストに基づいて生まれたものであり、けっして、妻が発信した(2)の発話を忠実に伝えようとしたものではないということである。

次に筆者が妻に宛てた伝言(3)とそれを受けた大阪の某病院の看護婦さんが書き残したメモ(4)であるが、ここには幸い「聞き違い」は生じていない。しかし、興味深いことに(3)において「… 電話してほしいと伝えてください」という、いわゆる、「間接話法表現」が(4)においては「… 本屋にまだ居ますので tel くださいとのこと」というように「直接話法表現」に変っていることである。

- (3) 「家内にまだしばらく東京の書店にいるので電話してほしいと伝えてください。」



<間接話法表現から直接話法表現へ>



- (4) 「主人^{さん}から tel あり、しばらく東京の本屋にまだ居ますので tel くださいとのこと」

間接話法とは何か、直接話法とは何かということは後ほど詳しく論じるが、(3)から(4)へのプロセスが一般に広く、かつ堅く信じられている「直接話法から間接話法を導きだすことはできるが、その逆は不可である」という考えとは全く逆のプロセスを取っていることは注目に値する。つまり、「間接話法」から「直接話法」が作られているのである。筆者自身、妻に(4)のような丁寧で、よそよそしい表現(「居ますので tel ください」)は使わないにもかかわらず、この看護婦さんはそのように伝達しているのである。もちろん、(4)は次のようであってもかまわない。

- (4') 「主人^{さん}から tel あり、まだしばらく東京の書店にいるので電話してほしいとのこと」

しかし、これではこれを受け取る妻に「失礼」あるいは「冷たく」受け取られるという判断が働き、おそらく、それを避けるために「…居ますので tel ください」という「直接話法表現」が選ばれたと考えられる。まさしく、これも元の発話を基盤にするのではなく、伝達を行う病院というコンテキスト、さらに、伝言が筆者の妻へのものであるという「スキーマ」にそってこのような丁寧なメモが書き残されたと解釈できる。つまり、(4')のような表現は文法的(grammatical)ではあってもこのコンテキストには不適切である(unacceptable)という談話上のルールが働いていることが分かる。

ここでのほんのわずかのデータ分析からでさえ明らかなことは、我々の言語活動の源である伝達という行為はそのためにいかなる表現がとられようと、それは元々のメッセージが発された場ではなく、それが伝えられる新た

な伝達の場合(コンテキスト)を基盤にして行われるということである。間接話法という、いわゆる、新たな伝達の場合を優先する伝達表現はいうまでもなく、一般に元々のメッセージに忠実であるべきとされる直接話法でさえ新たな伝達の場合を優先して生成されるのである。いや、むしろ、間接話法であれ直接話法であれ、我々はすべて新たな伝達の場合のスキーマにそって、それに適切な伝達表現を創造すると考えられる。本書の最大のねらいは、まさしく、このような伝達のからくりを解明することである。

ここで取り上げたような伝達のからくりは何も日本語に限られたものではなく、おそらく汎言語的な現象であろうという推測は容易につく。実際、筆者は長らく米国に居住し、英語での生活を経験してきたが、英語の習得において困難なもののひとつはまさしく伝達表現であると確信している。本書で展開する引用研究のきっかけも米国での留学生活、教員生活がもとであり、ここでも折に触れて英語の例にあたることになる。現在筆者は日本語教育と深く関わっているが、日本語学習者、とりわけ、上級レベルの学習者はどのように日本語の伝達表現を理解し、また、生成しているのかという観点が取られるのもそのような理由による。

2. 引用研究への取り組み：基本的な立場

2. 1 伝達と引用

伝達という行為を大きく捉えたとそこにはある場面において発せられる発話を理解するというステップと、それを別の場面において誰かに伝えるという2つのステップが存在する。人がある場面との関わりからどのように発話を理解するのかを問うのが前者に関わる研究で、一方、ある場面においてどのように発話を行うのかを問うのが後者である。前者は、最近とみに注目を浴びている認知言語学(cognitive linguistics)、関連性理論(relevance theory)あたりの分野と言えよう。そして、後者は語用論(pragmatics)、談話分析

(discourse analysis), 社会言語学(sociolinguistics)の分野と言えよう。伝達の「理解」面に関する研究は後者の発話「生成」面の研究に比べてそれほど判明してはいず、それを本書で中心的課題として扱うことはできない。ここでは、むしろ、後者、つまり、人はどのように日本語という言語を媒介にして伝達という行為を行うのかを問う。したがって、ある人が発した、あるいは発する、発話(それは思考動詞「思う」などに導かれる心内の発話もあれば、実際に声に出す心外の発話も含む)をそれなりに理解し、それをどう伝達するか、ということが本書の課題である。ただ、「伝達」という用語にはある人が発した発話のみならず、話者自身のおのずからの感情・意志・思考内容を伝えるという意味も含まれるので、この点をはっきりさせるため、以後「引用」という用語を用いる。したがって、本書のタイトル『日本語の引用』が意味するところはここでいう「(日本語の)伝達のからくり」の解明を意図したものと同等である。

2. 2 引用表現の捉え方

一般に、引用という言語行為の結果生産され、そして、それを含みこむ(あるいは、「埋め込む」)地の文と何らかの形で境界線を持つ表現は「引用句」とか「引用節」と呼ばれる。本書ではそれらを「引用句」と呼び、引用句を含む文全体を「引用表現」と呼ぶ。また、2. 1で述べたように「ある発話を誰かに伝える言語行為」を示すには「伝達」より「引用」という用語のほうがふさわしく、それゆえ、前節で述べた「直接話法であれ間接話法であれ、我々はすべて新たな伝達場のスキーマにそって、それに適切な伝達表現を創造する」(p.5)という考えは、同じく、「直接話法であれ間接話法¹⁾であれ、我々はすべて新たな引用場のスキーマにそって、それに適切な引用表現を創造する」というように置き換えることができる。この考えは、実際、本書に一貫して流れるものであり、次にあげる「仮説：引用句創造説」として終始検証を行っていくものである。

仮説：引用句創造説

日本語の引用表現は、元々のメッセージを新たな場においてどのように表現したいかという伝達者の表現意図に応じて決まる。

この仮説については第2章で詳述するが、どのような引用表現であれ新たな場(コンテキスト)への適合が要求されるという帰結がここには含まれていることを強調したい。つまり、誰が誰に述べた(述べる)ことを新たな場で誰が誰にどのように伝えるのか、ということは引用という言語行為に関わる人間関係とその場の有様、そして、それに最もふさわしい言語形態を選ぼうとする伝達者の意図に応じて決まる、ということである。そして、引用研究においても最も大切なのはこのような言語環境(引用表現とそれを取り巻くコンテキスト)の記述と分析であると言えよう。

2. 3 分析の方法

いかなる言語表現もそれを取り巻くコンテキストから分離しては存在しない。とりわけ、引用という言語行為はコンテキストとの関係が密であることはこれまで何度も述べてきたし、それがまた引用研究の面白みでもある。つまり、引用研究は引用表現とそれを取り巻く言語コンテキストを常にその対象とすることになり、そのためにはできるだけ自然な言語環境に包まれた自然な発話をデータとすることが望まれる。本書において多くのデータがラジオやテレビのトークショーや実際の会話などから取られているのはまさしくその理由である。しかし、その一方、言語の深層に触れる分析を行うためには自然発話のみをデータにすることには限界があることも事実である。母語話者の言語直感(intuition)には、正しい、あるいは適切な表現とそうではない表現とを区別する能力が備わっているという生成文法の根本的な考えを引き

合いに出すまでもなく、自然発話データのみでは我々の言語直感を記述することはできない。本書において、とりわけ、構文論的分析を深めるためにはどうしても作例に頼らざるを得ないのは、そのためである。しかし、可能なかぎり自然発話にデータを求める努力は怠らないように努める。引用研究を談話分析の枠組みで捉える以上、それは大切な条件のひとつだと思うからである。

3. 本書の仕組み

本書は序章を除いて6つの章からなる。そして、それらは大きく分けて次の4つの部分からなる。

- 1) 引用句そのものを取り巻く環境の構文論的分析
- 2) 引用句創造説に基づく直接引用と間接引用、さらにそれらの間に存在する準直接引用と準間接引用の記述、分析
- 3) 引用とモダリティの関係
- 4) 引用のマクロ的分析

まず、最初の「引用句そのものを取り巻く環境の構文論的分析」は第1章で行う。たいてい無意識のうちに区別なく使われてしまう「引用」という用語と「話法」という用語の違いを最初に取り上げ、それから、日本語の引用には欠かせない助詞「と」の位置づけをこの30年ほどの先行研究をたどりつつ検討していく。そして、次に引用句の内容と引用動詞との関係を語用論的観点から考察する。

2)の課題は第2章と第3章で行う。すでに本序章で垣間見た引用句創造説を第2章で詳論し、直接引用といえどそれは新たな伝達の場に則した新たな引用表現の創造であることを見る。しかし、創造の産物であるからといっ

て、まったく、恣意的に引用表現が作られるのではなく、そこにも何らかの原則があることを確認する。前にも述べたが、直接引用表現は元々の発話にできるだけ忠実に再現するというのが通説である。したがって、日本語学習者にも特別の日本語学的支援が行われているわけではなく、彼等自身、単に元々の発話を再現するよう努力するか、あるいは、直接引用というものが実はそのようなものではないということに気づくと、自らの手でそのルールを探り出さなければならないのが現状である。そのような状態において、引用句創造説に表された引用表現の取り扱いは極めて斬新なものであると思われる。

引用句創造説は直接引用であれ、間接引用であれ全ては引用の場にふさわしい形態で創造されたとする仮説であるが、さらに直接引用と間接引用を結ぶ線にはより直接的か、より間接的かで決定される節々があり、伝達者は引用を取り巻く言語コンテキストと自分自身の表現意図に応じてそこにふさわしい表現を選ぶという考えでもある。直接引用とは新たな伝達の場に元々の場をできるだけ吸収させない努力をし、かつ、そこにできるだけ新たな発話らしい発話²⁾を盛り込もうとする言語行為であると考えられる。前者は視点調整を行わない＜視点調整(一)の原理＞と呼ぶことができ、後者は新たな発話生成を行おうとする＜発話生成(+)の原理＞と呼ぶ。一方、間接引用はそれとは逆の方向を取るもので、できるだけ視点調整を行おうとする＜視点調整(+)の原理＞とできるだけ発話生成を行わないようにする＜発話生成(一)の原理＞からなると定義づけられる。第3章ではこのような観点から間接引用を観察し、引用助詞「と」を伴わない極めて間接的な引用表現から、「と」を伴い、また、そこに発話性を有し、直接引用により近づく間接引用表現まであることを見る。

3)の「引用とモダリティの関係」は第4章で扱う。モダリティとはある命題に対する発話時点における話者自身の態度であり、発せられる発話にそれがその話者自身のものであるという印を付けるようなものだとも言い換えら

れる。一方、引用という言語行為は元々の発話を新たな伝達場に取り込む行為であり、モダリティによって元々の発話の場に密着させられた発話そのものを新たな伝達場へと剥がし取っていく行為であるとも言える。モダリティには文全体をすっぽり覆い、文のすべての要素に渡ってその話者の解釈しか許容しないものから、話者の命題に対する態度をそれほど強くは表示せず、それゆえ、容易に他への移行を許すものまで様々なものがある。とりわけ視点表現(ダイクシス)などの解釈は如実にこれらの関係をあらわし、あるモダリティに導かれたダイクシスは元々の話者の視点からの解釈しか許さなかったり、また、別のモダリティに導かれたダイクシスは新たな伝達場に立った解釈を容易に許したりする。その結果、直接引用読みしか許容しないモダリティを含んだ引用表現から、間接引用読みを簡単に認めるモダリティを持った引用表現まで様々なものが生まれる。その状態に応じて、準直接引用や準間接引用という引用表現形態が生まれてくることを第4章と第5章で観察する。

最後の4)の課題「引用のマクロ的分析」においては、それまでの比較的微視レベルの談話分析とは異なり、日本語学習者が産出した引用表現をよりどころに、日本語では引用表現の形態を取るにもかかわらず英語などではそうはならない情報のありかについて考察する。それは Kamio(1979, 1985) 神尾(1990)で提唱されている「情報のなわばり理論」に合致したものであり、マクロ的視野をもたないと解明できない引用研究の一分野と言える。この第6章では最後に本書における引用研究の「総観」も行い、まとめとする。

なお本書の中心的テーマである「引用句創造説」にまず関心がおありの読者には、最初に第2章から読みはじめ、それから、第1章、第3章という順序で読み進んでも何ら差し支えないことを断っておく。